

2014年8月9日（土）14:00～16:00 於：横浜美術館円形フォーラム

8月の定例研究会では、藤嶋さんの発表と、10月開催予定のシンポジウムの打合せを行いました。

『三溪画集』を読むー1「天下至楽也」

発表者：藤嶋俊會

『三溪畫集』に掲載された三溪自筆の絵画のひとつ「夕すゝみ 田園雑興三十題之一」を取り上げ、江戸時代の画家久隅守景の「夕顔棚納涼図屏風」や江戸初期の歌人木下長嘯子の和歌と照らし合わせながら、仕事に精を出しながら遊ぶ時は思いっきり遊ぶ庶民の暮らしぶりに政治の力量を見ようとする三溪の眼差しについて解説がありました。

『三溪畫集』は4輯6巻に及ぶ原三溪が描いた書画をまとめた画集で、第3輯までは三溪自身が編集と刊行に関わり、最後の第4輯第6巻は三溪没後の昭和15年8月に次男良三郎によって刊行されました。そこに収録された「田園雑興三十題」は、三溪が南風村荘を建てた伊豆長岡の周辺に取材した農村風景のシリーズです。そのひとつ「夕すゝみ」は、昭和4年に描かれたもので、仕事を終えた農夫の一家が、酷暑の中涼を求めて庭に蓐を敷き、上半身裸で思いのまま寛いでいる様子を描いています。

「夕すゝみ」に描かれる蓐の上の農夫一家と朧月がそれを照らす様子は、久隅守景の「夕顔棚納涼図屏風」を想起させます。また「夕顔棚納涼図屏風」は木下長嘯子の和歌「『夕顔のさける軒はの下すゝみおとこはててれめはふたの物』右天下至楽也。有誰如之（加敷）」に取材して描かれたと言われます。情報通であった三溪のこと、久隅守景の絵や木下長嘯子の和歌に触れたことはあったかもしれません。



シンポジウムの打合せ

原三溪市民研究会と横浜美術館と三溪園が主催して10月11日に開催されるシンポジウム「富岡製糸場と横浜の原三溪」の準備のための打合せを行いました。

